



193号 発行所/ 下関市長府外浦町1番1号 国立病院機構 関門医療センター 発行責任者/ 病院長 林 弘人 印刷/(株)アートネクスト

関門医療センター



簡単にできるマスクと手洗い!

冬の感染症対策

寒さも本番を迎えて、本格的な冬がやってきました。冬はかぜ症候群や肺炎、インフルエンザなどの呼吸器感染症のほか、ノロウイルスやロタウイルスなどの感染性胃腸炎等が流行します。冬に感染症が流行する理由として、気温と湿度の低さがあり、ウイルスは低い温度・低い湿度を好む性質があり、夏と比較して長く生きることが出来ます。さらに空気が乾燥しているため、咳やくしゃみの飛沫の水分が蒸発して比重が軽くなり、飛沫に含まれるウイルスが咳やくしゃみと



鼻と口をしっかりと覆いマスクを顔に密着させることが大事

多くの感染症の主な感染経路は、感染しているヒトの咳やくしゃみなどの飛沫を吸い込む「飛沫感染」、ウイルスの付着した手指からの伝播による「接触感染」です。これらの感染経路を遮断することが必要です。誰でも簡単にできる対策として、マスクの着用と手洗いがあります。マスクは、ウイルスの侵入を防ぐことができます。不織布のマスクで鼻と口を覆い、隙間

ともにより遠くへ運ばれ、感染範囲が拡大していきます。私たちの身体はどうでしょう。寒さのために体温が低下し、免疫を担う細胞の働きも低下します。夏と比較して水分摂取量が少なくなるため、体内の水分量が減ることに加え、空気の乾燥によって喉・鼻腔・気管支の粘膜が乾いた状態となり、ウイルスが身体に侵入しやすく、感染を起しやすくなります。

乾燥予防として水分摂取やうがいも重要です。また、湿度を保つために加湿器を使用される場合は、汚れた水のエアロゾル(目に見えない細かな水滴)を吸入したことが原因とされるレジオネラ症の発症事例がありますので、タンクの水は毎日完全に換えること、タンク内の清掃を忘れずにおこなってください。

日頃から休養や睡眠を十分にとることも感染対策のひとつです。冬の感染症から身を守り、みんなで暖かな春を迎えましょう。



流水と石けんで手洗い



感染管理認定看護師 たかやま かよこ 高山 佳代子

日曜日の朝は「サンデー健康応援講座」(予定) 毎月第4日曜日10:00~11:00 関門医療センター3Fホール

2月24日(日)「放射線被ばくについて」

診療放射線技師 大場 湧貴 どなたでもご自由に参加できます



病院外壁に映るプロジェクションマッピング

また、治療を継続して体内のウイルス量が減少すれば、HIVに感染している人から他の人への感染リスクが低くなる。正しい理解や予防を呼びかけています。ただ、残念なことに未だ日本におけるHIV/AIDS新規報告者は1日4人という状況にあります。1人ひとりがHIV/AIDSを理解し、蔓延を予防していく、そして安心して治療を受けることができるように今後も尽力していきたいと考えています。(資料等はAPLINE参照)

World AIDS Day 2018

皆さんはWorld AIDS Day(世界エイズデー)をご存じですか?世界エイズデーは世界レベルでのエイズの蔓延防止と患者、感染者に対する差別、偏見の解消を目的にWHO(世界保健機関)が1988年に制定したものです。毎年12月1日を中心として、世界各国でエイズに関する啓発活動が行われています。今年の世界エイズデーのキャンペーンテーマは「UPDATE(エイズ治療のことHIV検査のこと)」です。HIV/AIDSに関する取組は、今年、大きな転換期となっています。治療法の進歩によりHIV陽性者の予後が改善された結果、HIV陽性者は感染の早期把握、治療の早期開始継続によりエイズの発症を防ぐことができ、HIVに感染している人がいち早く治療につながることを視野にいたれた啓発運動が求められています。関門医療センターでも毎年この活動に賛同し、玄関ホールでの展示や病院外壁へのプロジェクションマッピングの実施などを通して、地域の方々へHIV/AIDSの正しい理解や予防を呼びかけています。ただ、残念なことに未だ日本におけるHIV/AIDS新規報告者は1日4人という状況にあります。1人ひとりがHIV/AIDSを理解し、蔓延を予防していく、そして安心して治療を受けることができるように今後も尽力していきたいと考えています。(資料等はAPLINE参照)



産婦人科 医師 林 公一

ボランティア [クリスマス演奏会・手作り迎春グッズ]

平成30年12月25日(火)梅光学院大学によるハンドベルコンサートが開催されました。会場の皆様はこの時期ならではのハンドベルの音色に耳をすまされたいました。一人でいくつものハンドベルを持つ演奏する手さばきの良さに驚いたのではないのでしょうか。プログラムは10曲程あり、中には一緒に歌った曲もあり、クリスマスの日にとってもふさわしいイベントになりました。



〒752-8510 下関市長府外浦町1番1号 国立病院機構 関門医療センター 診療受付時間: 午前8:30~11:30 午後(各診療科外来にお問い合わせください) ※土曜日・日曜日・祝祭日は休診 ※臨時休診は各外来窓口に表示

部署紹介 地域医療連携室

地域医療連携室は、看護師 入院患者さんの退院支援や5名MSW5名事務員2名 病気の療養に伴う社会的・経済的・心理的問題など、構成されており、予約調整部 生活問題全般の相談に応じて、業務を行っています。 入院中の患者さんだけでなく、外来患者さんの対応も行い、トータル的な相談支援を行っています。 電話相談でも窓口相談でも対応可能です。お困りごとがございましたら、お気軽に地域医療連携室へご相談ください。



★代表 TEL(083)241-1199 FAX(083)241-1301 ★地域医療連携室 TEL(083)241-1191(2561) FAX(083)241-1302 (★透析センター FAX(083)241-1308) http://www.hosp.go.jp/~kanmon/



職員・医療従事者を対象にした講演会

総合診療科での診療では不明熱の方の診察のコンサルトをさせていただきました。ドクターGにもテレビ出演されている先生の総合診療の診察を見学

「最初のうちはできないことが多いと思いますが、患者さん一人ひとりをしっかり診ていくことが成長に繋がります。とにかく初期研修医の間はベッドサイドに居ることが大事です。頑張ってください」



研修医への指導



研修医への指導

感染症内科医の診療を体験して

10月19日、忽那(くつな)賢志先生の講演会に参加させていただきました。忽那賢志先生は国立国際医療センターに感染症内科医として勤務されており、新興感染症、再興感染症、輸入感染症を専門とされています。また、臨床研修制度が開始された際の関門医療センターの臨床研修医1期生であり、私たち研修医の偉大なOBの先生です。

日本では、感染症内科が独立している病院は少ない中で、国立国際医療センターでは感染症内科が独立しており、しっかりと各科の感染症をマネジメントされています。私は大学生の時に1度だけ国立国際医療センターの感染症内科を見学したことがあるのですが、日本ではあまり出会うことのない輸入感染症から日常でよく出会うcommonな感染症まで幅広く診療されており、カルチャーショックを受けたことを今でも覚えています。

午前中の総合診療科での診療から午後講演会まで参加させていただきました。



臨床研修医(1年) さかきばら たかひろ 榎原 崇広

さかせていただく機会はとても貴重であり、有意義な時間を過ごすことができました。午後の講演会では、感染症についてのイロハを二から教えていただきました。特に、抗菌薬(細菌を治療する薬)の使用に関して、最近アップデートされた知識を踏まえてレクチャーしていただきました。どの科で働いていても日々、外来や病棟で抗菌薬を使用する機会は数多くあり、大変勉強になりました。漫然といても使っている強い抗菌薬を処方するのではなく、患者の状態・原因菌・感染臓器に合わせて抗菌薬を選択することの重要性を改めて学ぶことが出来ました。この経験を今後の関門医療センターでの診療に生かしていきたいと考えています。

感染特集

ICT(感染対策チーム)の役割と目的

病院での感染対策チームはインフェクションコントロールチーム(Infection Control Team)・ICTと呼ばれ、院内で起こる色々な感染症から患者さん、家族、職員の安全を守るために活動を行う組織です。医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師などさまざまな職種が集まり、組織横断的に院内の感染対策活動に従事し医療の質の向上を目指しています。院内感染対策業務としては(表)のように多岐にわたっています。更には、院内のラウンドを1回/週以上行い、抗菌薬の使用状況や感染対策の実施状況、環境管理などをチェックしています。



ICT(感染対策チーム) 外科医師 ひであき 穂村 秀明

同カンファレンスを行うことが求められており、感染対策の評価や情報共有を行っています。医療材料の新規採用や変更に関する提案を行うこともあります。ICTは自分たちの管理に最善を尽くして、患者・家族、職員が医療関連感染に罹るのを防ぎ、「可能な限り最小限」に減らすよう尽力しています。

ICT院内感染対策に関する業務

各種サーベイランス(調査・監視をすること)の実施	厚労省感染サーベイランス(JANIS)参加、手指衛生、微生物検出状況サーベイランス
針刺し・粘膜曝露対策	発生状況の把握、曝露後対策
職員健康管理	予防行動の指導、抗体保有状況の把握、ワクチン接種の推進・調整
職員教育	感染対策研修会の企画・運営
感染対策マニュアル作成・見直し	各種ガイドラインを院内マニュアルへ導入
感染症発生時の対応	状況の把握や対策の検討、指導、相談
感染性医療廃棄物処理	管理状況の監視、対策検討、指導
コンサルテーション	感染管理に関する助言



カンファレンスの様子

治療としての抗菌剤の使用状況を把握し、抗菌薬適正使用の支援は抗菌薬適正使用支援チーム(AST)として活動しています。感染予防に関する調査、研究、具体的な実施対策などは委員会、院内Webを通じて院内スタッフ全員に知らせています。また、ICTは地域その他医療機関との連携として相互ラウンドや合

国立保健医療科学院 「地域保健臨床研修専攻科研修」に参加して



臨床研修医(2年目) まつくま こう 松隈 航

国立保健医療科学院では保健、医療、福祉に関係する様々な分野の研修が年間を通じて開催されており、私が今回参加したのは公衆衛生分野を幅広く網羅する2ヶ月間の研修です。講義では多方面の専門家の方々からお話を伺うことができ、感染症、地域医療、国際保健など医療をマクロな視点から考えるものから、たばこ対策、AI、水質管理など医師の専門知識ではないものの健康に深く関わるものまで内容は様々でした。また、この研修は豊富な院外研修が特徴であり、厚生労働省、国立感染症研究所など国内の組織だけでなく、スイスではWHO本部で世界的な問題点や取組の現状について講義を受け、フライピンでは途上国の医療研究の現場を見学させていただきました。国立機関での研修だからこそ機会を設けられたものばかりで、非常に貴重な経験となりました。



スイスのWHO本部にて

風邪と抗菌薬



薬剤部 しょうた 柳井 翔太

風邪は、誰にとっても身近な病気です。風邪とは、主にウイルスが原因で起こる鼻のどのの奥の急性の感染症を風邪と呼びます。風邪は、患者のくしゃみやなどで飛散する飛沫を介してウイルスや細菌などの病原体が、気道内に入って気道粘膜に付着し、侵入・増殖することから始まるとされています。風邪には「抗菌薬(抗生物質)が効果ある」や「肺炎になるのを予防する」などの誤解から薬を飲まない不安との訴えで、抗菌薬を処方される現状があるようです。

抗菌薬は細菌と戦う薬です。細菌とウイルスは全く別の病原体のため、ウイルスによつて起こる風邪には、抗菌薬を飲んでも効果がありません。抗菌薬が処方されるときは、細菌感染が疑われる場合になります。例として、細菌による肺炎や扁桃炎などの時です。抗菌薬の乱用により、抗菌薬の効かない菌(耐性菌)を作りだしてしまいます。耐性菌に感染した場合には治療が困難になる恐れがあります。

また、処方された抗菌薬を途中で飲むのやめることも、耐性菌を作り出すきっかけになります。耐性菌を作り出すさないためにも、処方された抗菌薬を自己判断で中止してストックしておかない、他人にあげない、もらわないようにしましょう。また、自己判断での抗菌薬の使用はせずに、医師の診断を受け、処方された場合は、用法用量、服用日数を必ず守り、飲みきるようにしましょう。

